

新潮文庫

アポロンの島

小川国夫著



新潮社

しま
アポロンの島

定価はカバーに表
示してあります。

新潮文庫 草 159B

昭和五十三年一月二十日 印刷
昭和五十三年一月三十日 発行

著 者 小 川 国 夫

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 新 潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一
編集部(〇三)(二六六)五四二
振替東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

アポロンの島

小川国夫 著

新 潮 社 版

F448

目次

エリコへ下る道	一〇
枯木	一〇
貝の声	一四
エリコへ下る道	二〇
重い疲れ	二七
アポロンの島	三〇
ナフプリオン	四〇
寄港	四九
スイスにて	五四

シシリ―島の人々…………… 六四

エレウシスの美術館…………… 八〇

アポロンの島…………… 八五

動員時代

海と鰻…………… 一二四

箱 船…………… 一二八

東海のほとり…………… 一三三

雪の日…………… 一五七

お 麦…………… 一六三

夕日と草…………… 一六八

動員時代…………… 一七一

大きな恵み

海の声

遊歩道

大きな恵み

ボス

大きな森

自分の作品について

解説 島尾敏雄

一八〇

一八七

一九二

一九六

二〇〇

二二二

ア ポ ロ ン の 島

エリコへ下る道

枯木

市は山の中腹に建てられていて、牢^{ろう}は市の上の外れにあった。その日も、夜が明ける前に、驢^ろ馬の鳴き声があちこちに起った。彼は独房に微光が来ると起きて、ゆかに指でなにか書いていた。いつの間にか夜は明け放たれていた。兵隊が来た。そして、一人が、うずくまっている彼に――起て、といった。

彼が立ち上ると、兵隊は彼の足元にしゃがんだ。足枷^{あしかせ}をはめるのだ。はめ終ると、兵隊は剣を抜いて、彼の両足の親指の爪をはがした。その日の最初の血が流れた。血は廊下の灰色の石の上では黒っぽかった。そして監獄の門のひなたでは赤かった。つめかけた群衆は静まった。

坂はそこから始っていた。刑場は谷底で、雛菊^{ひなぎく}の谷とよばれていた。

彼は、一步一步、坂を下りたが、足枷の、鎖についた鉄の玉に始終せきたてられた。そして、時には足をとられてころんだ。彼がころぶと、兵隊達は止って待っていた。彼は一人で起き上った。鉄が喰い込んで、くるぶしの上の皮膚は破れていた。

敷石道が終った。そこから坂は更に急になった。しかし群衆はへらなかつた。

彼は土へ第一步を踏み出した時よろめいた。立直ろうとしてひどくころんだ。彼はしばらく起

き上らなかつた。兵隊達は彼のまわりに、黙って立っていた。彼は目を閉じていた。兵隊の一人が酔を飲ませようとしたが、彼は顔をそむけた。兵隊は器を彼の口へ押しつけた。彼は

——やめろ、といった。

兵隊は薔薇の太い枝で彼の背中を打った。

——やめろ、とまた彼がいった。

木
兵隊は彼を続けて二回打った。一回目は頸筋に、二回目は顔に、痕をつけた。彼は立上った。彼は正面を、すなわち、向いの崖とその上の空を見て、立っていた。二、三人の若い兵隊は興奮

していた。

枯
彼はまた歩き出した。人々は、彼がいつまで歩けるか、と思っていた。ころぶのを期待している人と、ころばないように……と知っている人があった。彼はころびそうになると立止って、しばらく息をしていた。群衆の差し出した布切れを顔に当てて、仰向いて、顔をおさえていたこともあった。

——あの人が死んだ。死刑にされたんです、と少年がいった。男は黙っていた。少年は男を見ていた。やがて男はポツンと

——そうか といった。

——二人で明け方湖へ下りて行った時をおぼえていますか……。あの時、あの人は抜けるように青白い顔をしていましたね……。でも、大きい手は暖かった……。と少年がいった。男はうなずいたきりだった。その様子は、自分を手ばなしで風になぶらせているようだった。風は平原をゆるく動いていた。

——あの顔には血と汗が一杯でした。そして、何回も鎖についた鉄の玉に足をとられながら、私たちに近づいて来たのです

——フィロメナは……。嘆いたろう……。と男は地平線の山を見たままでいった。彼女は男のいいなずけだった。そして少年の姉だった。

——ええ、お母さんと二人で、あの人に布切れを渡したのです

男はうなずいた。少年は続けた。

——あの人はきれで顔をおさえて、しばらく立っていました。坂を下りるようにせきたてる鉄の玉の重みを、休こらえていたんです……。きれを顔からはがすようにとると、フィロメナにかえしました。そして《生木でさえこの通りだ。枯木はどうなるのだろう》と呟つぶやいたのです

男は胸を突かれたように、なにもいわなかった。

男は腰掛けていた柵さくから地面へ下りると歩き出した。草を食べていた羊が途みちをあけた。少年も柵から下りると、男に追いつがって行った。

——フィロメナはあの人に、なんにもいわなかったのか……。と男がきいた。

枯

木

——いいませんでした。いえなかったのです、少年はこたえた。

——私だって喉に蓋が閉ったようでした。あの人が体中でしている息を聞いていたんです
それから、二人はしばらく黙って歩いていった。

——私はあの人の呟いた言葉を考えているのです、と少年がいった。

——どういうことでしょうか……

男はこたえなかった。しかし、彼は暗い顔を少年の方に向けていた。少年は男のいうのを待っていたようだったが、

——あの人が死んだことが信じられますか……　ときいた。

——そうだ、死んだとすれば、一遍生れかけた大きな物が、また土の下へかくれてしまったんだ、と男は、唐突に大きい声でいった。

——ユニア、俺たちは死なないようにするんだ、と男はいった。

——そうです、少年は頷いた。そして

——あの人は、鉄の玉に引ずられて倒れないように、一步一步、谷底へ下りて行きました、と
いった。

貝の聲

コニヤックをもう一杯くれ……。子供か……。子供を見たらもう駄目だな
 本当ですね旦那

映画だって、子供が出て来たら、もう駄目だ

可愛いですね、旦那は子供さんはおいくたりで……

一人あつたんだ、無くしちゃったよ……

それは、お辛かったでしょう……

……。あんな子供は何人だ……

一人です、旦那。女の子で……。シャルロットっていうんですがね……

学校へ行ってるの……

ええ、二年生ですよ

コニヤックをもう一杯くれよ

へえ……。失礼ですが、旦那は拳闘家で……

わかるかな……

——どうも御様子で……

——バーテンがそういうと、ジャンガストは、何かを見詰めながら、笑った。

——もう一杯くれ……、そこに置いてあるのはどこの貝……

——ああこいつですか、私が兵隊でマダガスカルへ行った時、持って帰ったんですよ
——ちよつと、見せてくれ

——奇麗なものですよ……、へえ、どうぞ

——なかなか重い

——全くですな、持って来る時は面倒ですが、あとで思い出になりまさあ

——ここが欠けているな

——いや、手に入れた時からそうになっていたんで、惜しいですよ

——もう一杯

——へえ、旦那

——貝殻の色ってのは褪^あせないものだな、海にある儘^{まま}だ

——へえ、全く……

——ジャンガストは、夕刊を読んでいる浩の横顔を、見詰めていた。バーテンはそれが気になったので

——安南人ですな、といった。